

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#011(半田)(2022/07/29 uploaded)
「眺望論において、果たして眺望は可能なのか」(30:39)

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#011(半田)(2022/07/29 uploaded)
「眺望論において、果たして眺望は可能なのか」(30:39)



みなさん、こんにちは。ヌーソロジー研究所の半田です。前回の研究動画から、どうにかヌーソロジーの解説らしき話に入ることができてきました。前回はみなさんに客観空間と主観空間との違いについて、簡単な解説を行い、この2つの空間の間にある違いを「存在論的差異」という言葉で表現したと思います。



ヌーソロジーはこの存在論的差異という概念を明確な幾何学的イメージへと変換して、私たちの空間認識の中に取り込むところからスタートします。そして、この新しい空間認識を通して、私たちの無意識の中に沈み込んでいる、あのハイデガー言うところの存在というものを開いていこうとする思考体系になっています。

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#011(半田)(2022/07/29 uploaded)
「眺望論において、果たして眺望は可能なのか」(30:39)

今回の研究動画では、客観空間と主観空間の間にある、この存在論的差異のニュアンスをみなさんにもう少し深く理解して頂くために、野矢秀樹氏の『眺望論』という考え方を題材に採り上げて、この眺望論とのコントラストを通じて、ヌーソロジーが開こうとしている新しい空間の考え方に、触れて頂ければと思っています。



題して『眺望論において、果たして眺望は可能なのか』。このタイトルで行きます。挑戦的でいいですね。どうぞよろしく申し上げます。

**Research
Announcements**
#011

眺望論において、果たして眺望は可能なのか？

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 半田 広宣

眺望論において、果たして眺望は可能なのか

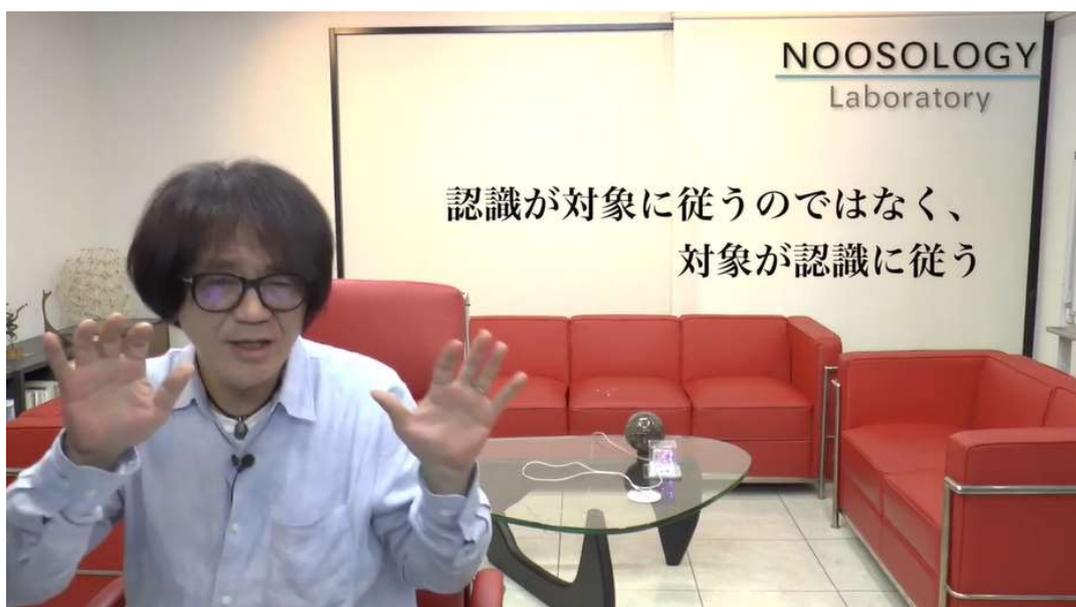
半田 広宣

では、始めましょう。

まず、最初に野矢秀樹氏の紹介を簡単におきます。野矢氏は前回紹介した大森荘蔵の門下生に当たる方で、現在日本を代表する哲学者とも言われている人物です。野矢哲学における問題意識は、ひとことで言うと、主観性に重きを置いた従来の哲学的視座の解体と書いていいと思います。もう一回言いますね。「主観性に重きを置いた従来の哲学的視座の解体」です。



哲学に詳しい方は、既にご存知のように、近代以降の西洋哲学というのは、カント由来主観に重きを置いた展開をしてきました。カント以前の時代は、まずは客観としての対象世界があって、そこに人間ひとりひとりの主観的意識世界が生まれているという考え方をしていたのですが、カントの例の有名な「認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う」という認識論におけるコペルニクス的転回というものによって、世界は人間の認識能力に合わせて、形作られ、存在すると考えられるようになったのです。



実際、カントの現代的な後継者と見えるフッサールなんかは、その生涯を通じて、主観的世界からいかにして客観的世界というものが人間の意識に形作られてくるのか、構成されてくるのか、その問題を一生のテーマのようにして、「現象学」というものを作り上げました。



現象学では、従来の客観と呼ばれていた世界は異なる主観同士の共同関係によって生まれているものというふうに解釈され、「間主観性」と呼ばれるようになります。



このフッサールの現象学は、その後、現代哲学の一つの大きな潮流を作り上げていくのですが、果たして自己の主観と他者の主観とが全く対等な形で、調和的な形で存在する間主観的世界の構成に、フッサールが成功したかと言うと、現象学は独我論を免れていないとかいう人たちもいて、まだはっきりとした答えは出ていないというのが現状だと思います。

おそらく、野矢氏はこうした主観性を出発点とする哲学に早くから限界を感じていたのだと思います。確か最近のインタビューでも言うておられましたが、野矢氏の哲学の着想は哲学がこれまで前提としてきた、この認識主観というものをいかに否定するかというところにあります。主観性を否定したところから、新しい哲学の可能性を考えているということです。まあ、これはこれで面白いですよね？

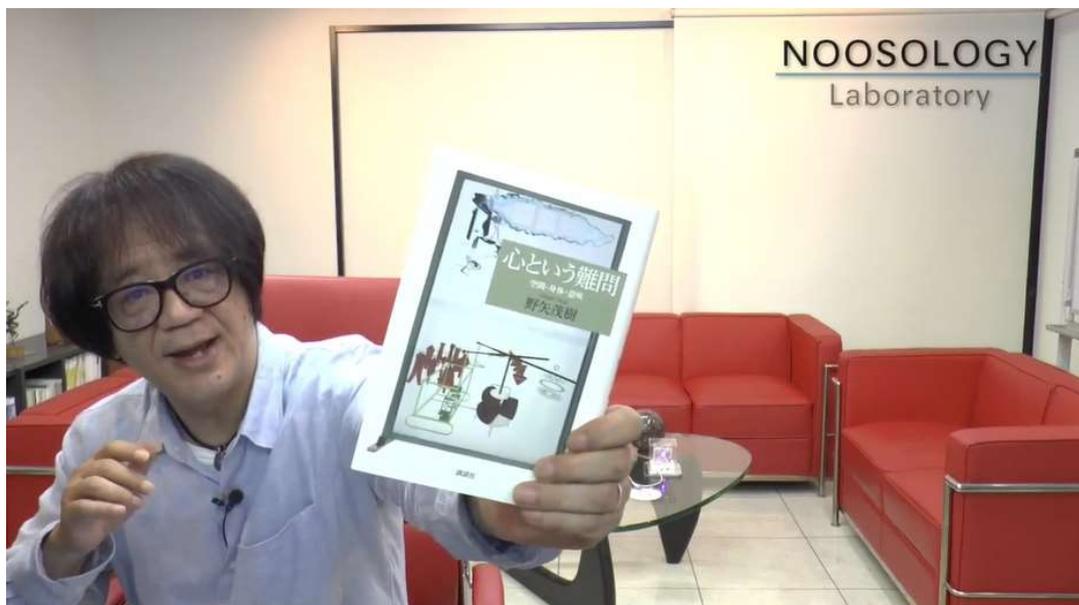
野矢氏は、認識主観といったような想定は意識が繭に閉じ込められているようなものだと思います。こうした繭から意識を救出・救済して、私たちの意識経験の場を、実在の中へとダイレクトに移し替えるというのかな？ わたしという主体を認識ではなくて、行為のレベルで取り出していこうとするところに、野矢哲学の特徴があります。野矢氏が持ったこうした思考のベクトルは、前回お話した主観と客観の一致は可能かという認識問題を、ある意味素朴実在論——普通の私たちが考える世界イメージですね——の中で解決しようとする、とても斬新な考え方も言えます。わかりやすく言えば、そもそも主観と客観の分離なんてものはないんだと。あるのは外の世界だけなんだという、そういう考え方です。この新しい実在論を展開するにあたって、野矢氏は眺望論と相貌論という二段構えの構成で、持論を展開していきます。



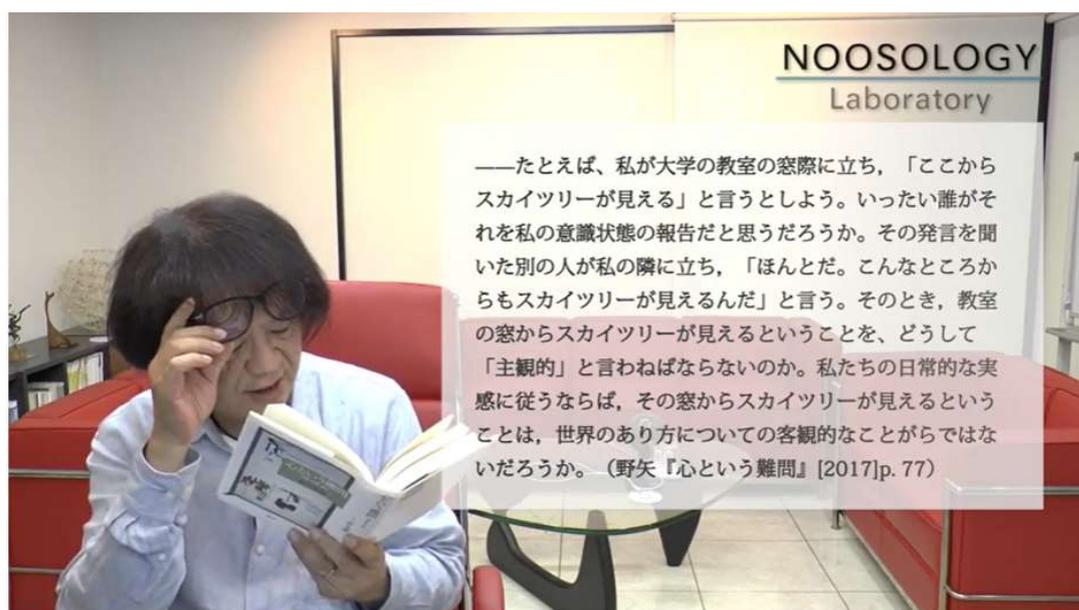
主客一致の世界観を、いわゆる私たちの普通の存在感覚——こういう感覚のことを哲学では自然的態度と言いますが、そうした自然的態度——の中で達成できないかと、考えられておられるわけです。いやあ、これはこれで実に面白いアプローチだと思います。こうした野矢氏の理論展開で、ヌーソロジーとダイレクトに関係してくるのは、眺望論の方です。眺望、世界への見えということですね。もう一方の相貌論の方に関しては、話が多少入り組んでくるので、ここでは主に、この眺望論の方の考え方をみなさんに紹介して、野矢氏の考え方にある問題点について、ヌーソロジーの観点から話してみたいと思います。

まずは、眺望論のポイントとなる部分を野矢氏の著書である『心という難問』という著書から拾い読

みしてみましよう。この本ですね。



確かここに折りを入れてました。はい、ここですね。ちょっと読んでみますね。



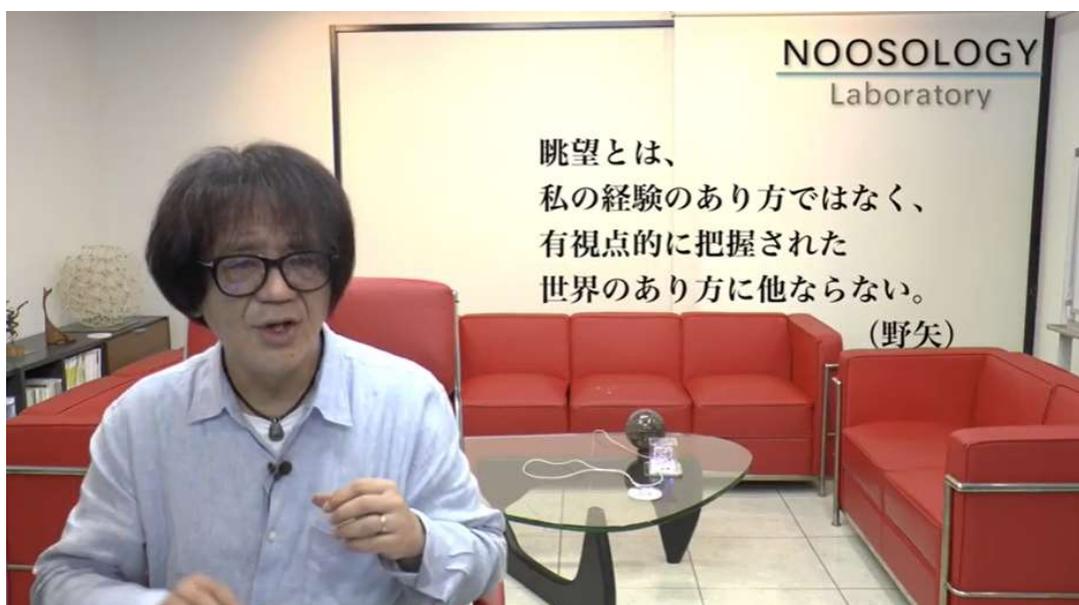
——たとえば、私が大学の教室の窓際に立ち、「ここからスカイツリーが見える」と言うでしょう。いったい誰がそれを私の意識状態の報告だと思うだろうか。その発言を聞いた別の人が私の隣に立ち、「ほんとだ。こんなところからもスカイツリーが見えるんだ」と言う。そのとき、教室の窓からスカイツリーが見えるということを、どうして「主観的」と言わねばならないのか。私たちの日常的な実感に従うならば、その窓からスカイツリーが見えるということは、世界のあり方についての客観的なことがらではないだろうか。(野矢『心という難問』[2017]p. 77)

「——たとえば、私が大学の教室の窓際に立ち、「ここからスカイツリーが見える」と言うでしょう。いったい誰がそれを私の意識状態の報告だと思うだろうか。その発言を聞いた別の人が私の隣に立ち、「ほんとだ。こんなところからもスカイツリーが見えるんだ」と言う。そのとき、教室の窓からスカイツリーが見えるということを、どうして「主観的」と言わねばならないのか。私たちの日常的な実感に従うならば、その窓からスカイツリーが見えるということは、世界のあり方についての客観的なことがらではないだろうか。」(野矢『心という難問』[2017]p.77)

こんな感じですね。どうでしょうか。野矢氏は、大森荘蔵のお弟子さんらしく、誰にでもわかる易しい

表現で、哲学を語る人物としても有名なのですが、ここでも、ストレートかつシンプルな言葉で、的確に野矢氏自身の思考の立ち位置が表明されているのがわかります。つまり、この野矢氏の眺望論では、眺望というものの自体が、元々実在的なものであって、私たちがどんな風景にせよ何かを見るということは、前回紹介した大森荘蔵の表現を使うなら、面体分岐におけるひとつの面の表現にすぎないということを言ってるわけです。体という全体における一部分が面として見えているわけですから、まあその通りと言えばその通りです。

普通哲学では、ここでこの面として捉えられた世界を、視覚器官が生み出した意識の産物として考えるのですが、野矢氏は「眺望とは、私の経験のあり方ではなく、有視点的——まあ、空間上に、視点が有るということですね——に把握された世界のあり方に他ならない、というふうに解釈します。



つまり、どういうことかと言うと、現象が立ち現れている拠点を、わたしという主観性の領域から、客観的実在世界の方へと移動させようとしているわけですね。このことは、言い換えると「見ることにおける人称の否定」を意味しています。わかりますか？

空間における視点の位置には、ここやそこといった違いは少なく、このここやそこに、わたしやあなたという人称を置いて考えるはいけないということです。視点に人称はないと言っているわけです。だから、他者が立っている場所にわたしが行けば、他者が見ている景色と同じ景色が見えるだろうし、また逆に、他者が自分の位置に立ったとすれば、自分と同じ外的な認識が他者にも得られるはずだ。そういう空間イメージですね。野矢氏の眺望論には人間の視覚認識というものを、パースペクティブ的にとでも言うのかな？ まあ、そういうふうに一元化して、私たちが個別的だと思っている主観空間をある意味客観空間の部分部分のパッチワークのようなものとして実在的空間の中にはめ込もうとするねらいがあるわけです。野矢氏はこのような考え方をおそらく師匠である大森荘蔵の例の面体分岐の考え方から発想されたのだと思いますが、でもこれは大森の考え方とはある意味真っ向から対立する内容になっているんですね。

どういうことかと言うと、大森は前回もご紹介したように、面体分岐の面としての知覚風景自体に見るもの側の心を見て取っていたからです。しかし、野矢氏の眺望論においては、さっきも言ったように、知覚風景というのは、外的世界の一部に過ぎず、そこに個別的な心といったようなものが登場する余地は全くありません。野矢氏にとって大森が言う心に当たるのは、この眺望論に続いて語られる相貌論という次なる論立ての中で展開されていきます。眺望論の方は、あくまでも見られている対象と見ているものの位置との空間的範囲の中で考えられたものですが、相貌論の方はこれにプラスして、時間的経過が加わっていくんですね。時間が加わると当然世界を眺望しているそれぞれの視点は自由に活動しているわけですから、そこに異なる風景の連続性や、それらの風景にまつわる固有の物語性などが生まれて来ます。こうした中で生まれて来るのが、野矢氏言うところの行為する主体というものです。「行為的主体」と言ってもいいでしょう。



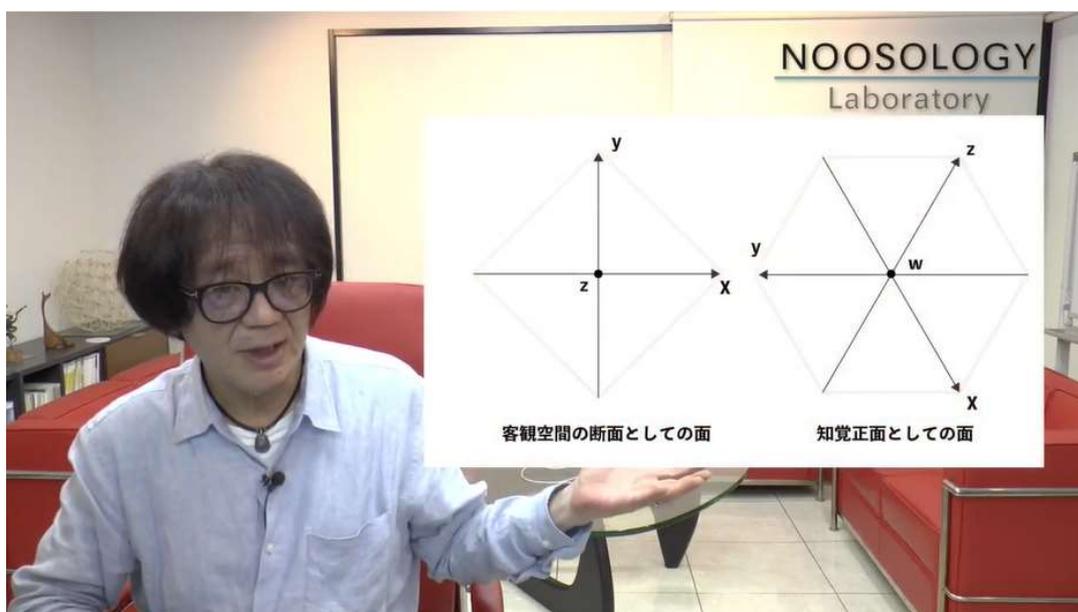
野矢氏にとって主体という概念は、あくまでも認識する主体ではなく、行為するところに生じてくるわけです。そして、この行為的主体の固有性、それぞれの固有性において、わたしやあなたといった人称の区別が生まれて来るのだと考えるわけです。これはちょうど物理学的に言うなら、4次元時空における質点の運動の軌跡を意味する世界線というのがあるんですが、それに対応している。そこに野矢氏は人称の起源を見ている、ということになるでしょう。このように考えることによって、野矢氏は主観と客観の区別は従来の哲学が考えているほど深刻ではなくなり、すべてはこの時空という実在世界の中で一貫させて語るができるようになって考えておられるのだらうと思います。もちろん、他にも付随した細かい議論はたくさんあるんですが、眺望論と相貌論を通して、野矢氏が主張しているのは、概ね以上のような内容です。

うーん、非常に面白いアプローチだと思うのですが、ヌーソロジーの観点からすると、野矢氏のこの考え方には大きな落とし穴があるように感じます。これはあくまでも私見ですが、この野矢氏の語る眺望論の是非を見極めていくためには、大森の言う面体分岐における面の意味合いについて、もっともっと深く考える必要があると考えます。野矢氏が眺望と呼んでいるものは、もちろん目に見えるこの知覚風景のことです。これは大森の面体分岐で言うなら面に当たるものですね？ この面は前回もお話したように、何が見えているかという客観空間をあるひとつの方向から見たときの面に当たるわけですから、単純に言葉通りに考えるなら、3次元空間の1切断面、もしくは、射影面としての2次元空間のことを指していることになると思います。実際、野矢氏も眺望をそのように解釈しています。しかし、一方で、大森荘蔵が面体分岐において語っていた面とは、その内容から察するに、知覚正面としての面です。「知覚正面」としての面です。

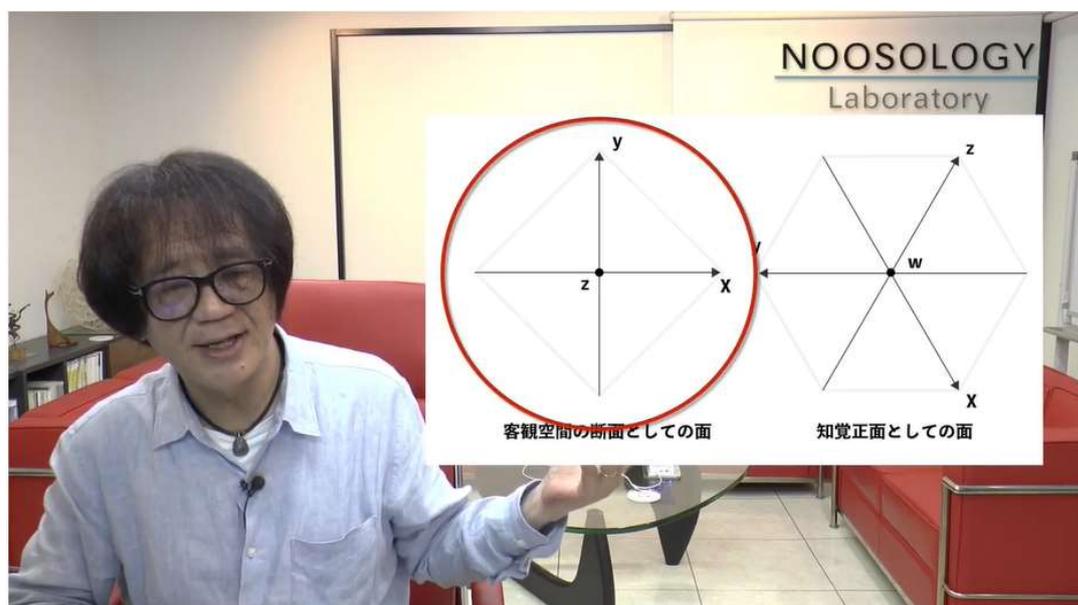


言い換えれば、この視野空間そのものに当たります。問題はここです。客観空間の断面として解釈された面と、知覚正面というこの視野空間としての面。果たしてこれらは同じものでしょうか？ヌーソロジーから見ると、野矢氏はここで大森の言う知覚正面を大きく、大きく捉え損ねているように感じるのです。大森は知覚正面を現象の立ち現れの間そのものとして考えます。大森にとって知覚されているということは、そこには必ず思いが込められていることを意味します。思いが全く籠らない知覚などあり得ないとまで、大森は言うんです。大森は、もしわたしに見ることができるのであれば、そこに見える世界はすべて心の像で表されるとそこまで言い切ります。大森にとって心とはわたしの内側に潜んでいる何か得体の知れないものではなくて、海や空、それから太陽や月、そしてその星々の世界まで広がっている何ものかなんです。大森が知覚正面のことを心と呼ぶ意味もここにあります。こうした意味合いで、面体分岐の面を考えた場合、僕なんかはそれは3次元空間の世界すべてを含んだ面じゃないかと思うわけです。つまり、単純な2次元としての面ではないということです。

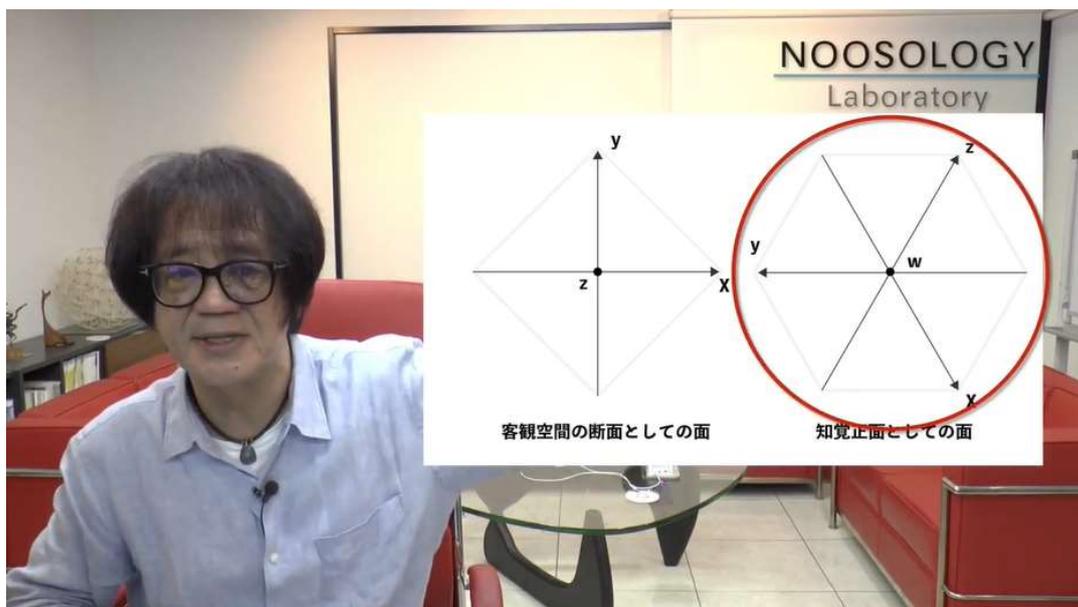
となると、この3次元空間全体を面として見ているものの位置は一体どこにあるのでしょうか？このときの視線は当然3次元空間に直交しているでしょうから、3次元空間の中なんかには存在してなくて、4次元空間の中にあるのではないかということになります。図に表せばこういうことです。



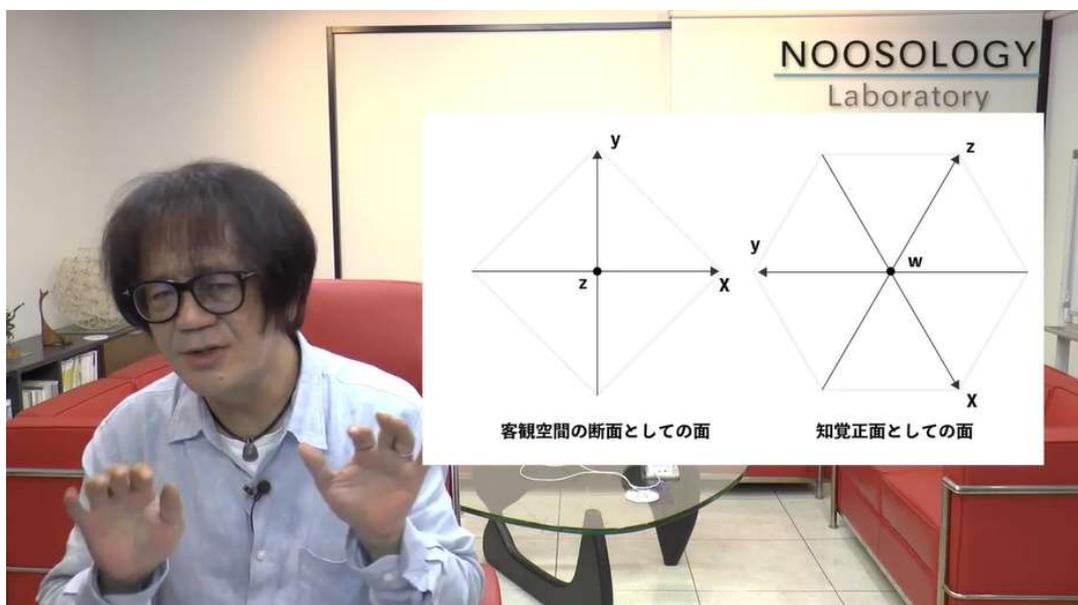
こちら側が野矢氏が考えている眺望が生まれている空間です。わかりますよね？3次元の中にある位置から世界を見れば、見える世界は2次元です。これはある意味、3次元空間の断面としての面になります。



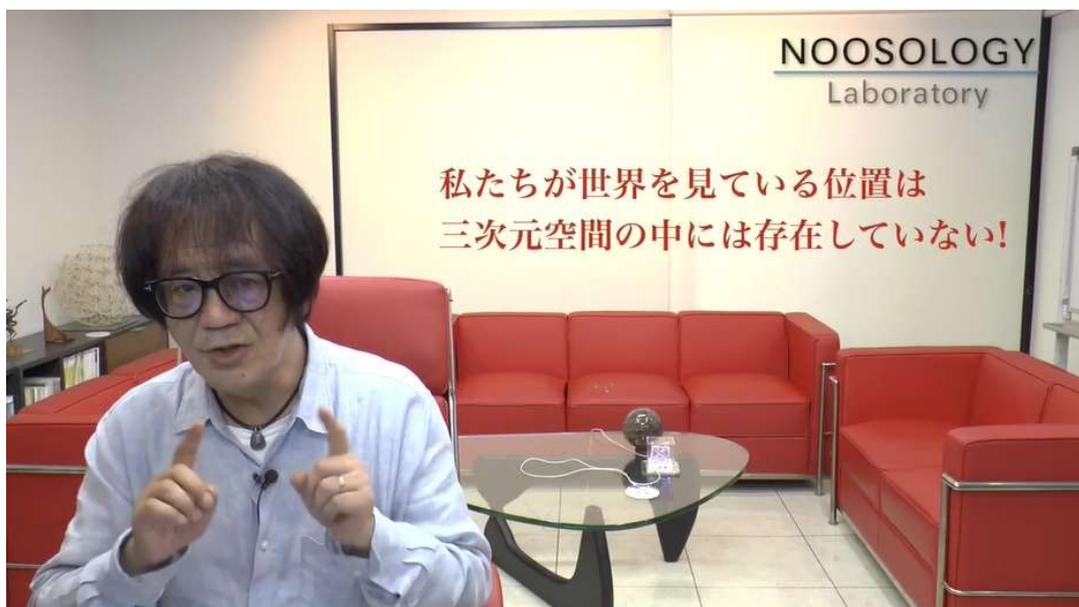
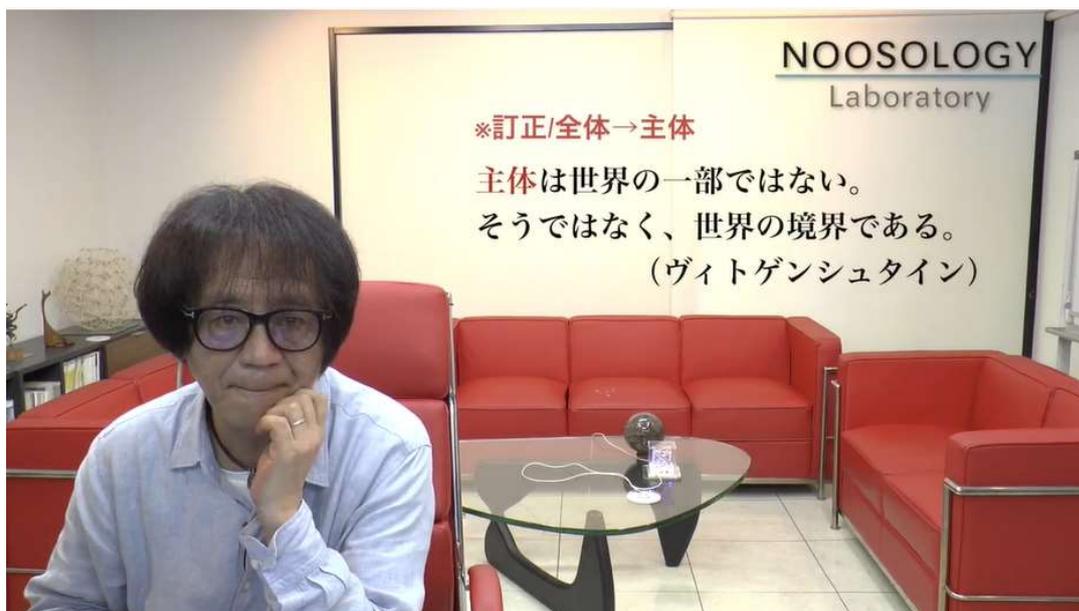
一方、向こう側が大森が使っている知覚正面としての面です。3次元空間がそのまま面として見えている状態です。ここでは面の上に描かれている3本の直線が3次元の座標軸 x, y, z を表しています。何が違うか一目瞭然ですよ？



野矢氏は視点の位置を 3 次元の空間の中に置いているのに対して、大森の知覚正面論における視点は、3 次元の中には存在しておらず、4 次元に出ているということなんです。これは前回お話ししたドゥルーズの喩えを用いて言うなら、野矢氏は眼を相変わらずカメラの位置に考えているのに対して、大森はおそらくドゥルーズと同じで、眼をスクリーンとして感じ取っていたのではないかと思います。



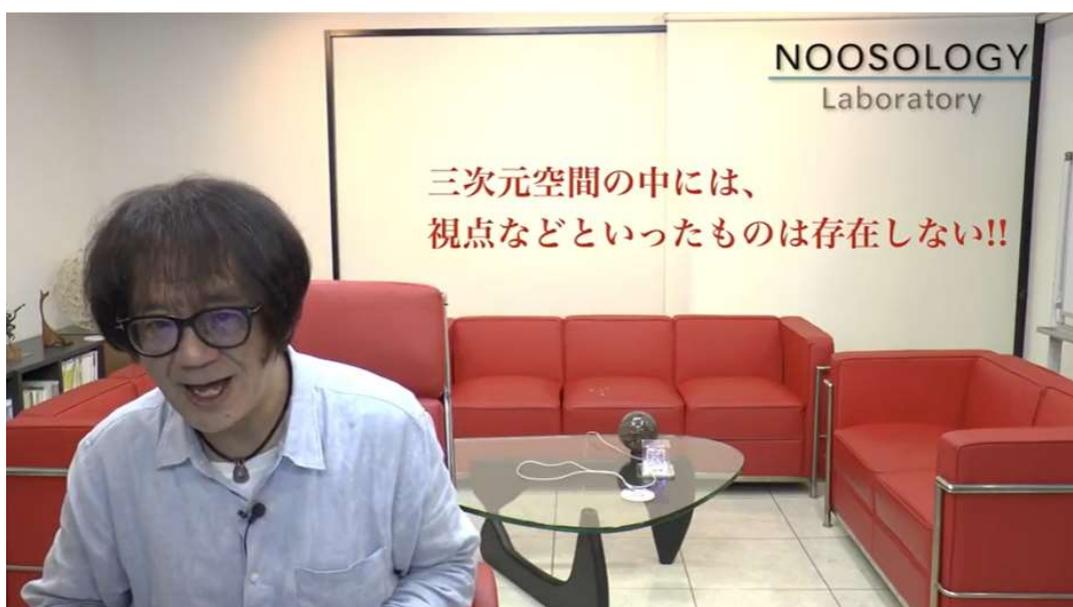
全体は世界の一部ではない。そうではなく、世界の境界である。というのはヴァイトゲンシュタインが語った有名な言葉なんですけど、大森の知覚正面論が語っていることの本質は、このヴァイトゲンシュタインの言葉と同じように、私たちが世界を見ている位置は、3 次元空間の中には存在していない、ということなのだと思います。



となれば、対象と視点の空間的な位置の関係によって眺望が規定されるとする野矢氏の考え方は全くのフィクションと言わざるを得なくなります。つまり、わたしが立っているここから、あなたが立っているそこへと、3次元空間の中でその見る位置を変えようとも、わたしにはあなたが知覚している世界を見ることはできず、そこは相も変わらず、わたし固有の世界でしかないということなんです。野矢氏はこうした見えるということの4次元的な現実を捉え損ねているわけですね。言い換えるなら、野矢氏の眺望論においては眺望は可能ではない、ということなのです。言っちゃった！可能ではないんです。



3次元空間の中には、自己であれ他者であれ、視点などといったものは存在していないんですよ。
3次元空間の中には。わかりますか？



さあ、このことを直観的に見抜いていた画家がいます。それが前回も最後に紹介したルネ・マグリットです。前回ご紹介した『人間の条件』という作品は1933年の作品ですが、続いて1937年だったと思いますけど、マグリットは『複製禁止』というタイトルの作品を発表します。それはこんな作品です。よーくご覧になって下さい。



壁に掛かった鏡の中に、鏡を見ている人物がそのまま鏡の中の空間へと入り込んだような構図になっているのがわかります。鏡の外側にいる人物が自分を鏡の中の空間にコピーしているのです。そして、マグリットはそんなことをやっちゃダメだよという意味を込めて、この作品に『複製禁止』と名付けたわけです。複製禁止、これはどういう意味でしょうか？ 今までの話を聞いてきたみなさんには、もう察しがつくでしょう。この鏡を先ほどお話したこの知覚正面を作っている視野空間の面として考えてみて下さい。鏡の中の世界はその視野空間の中にある3次元の世界です。3次元の世界には他者という存在がこうやって肉体として存在しているので、主体は自分もその他者と同じような存在だと思い込んでしまい、自分自身を鏡の中の空間に肉体イメージとして、投げ込んでしまいます。そうすると、自分が世界を見ている位置が、あたかも3次元空間の中にあるかのようにして錯覚してしまうのがわかります。さっきのスクリーンとしての面がひょいっと入って、カメラとしての眼になってしまう瞬間です。マグリットはそういうことをやってはいけないという意味で、この作品のタイトルに『複製禁止』と名付けたのだと思います。目の前に世界が開くということ。つまり、眺望は鏡の外からの視線があって、初めて成り立つものなことなんですね。主体は決して鏡の中にはいるわけではないのです。きょう最初に言った「存在論的差異」という言葉をここで思い出してみてください。主観空間と客観空間との間にある、この存在論的差異とは、まさにここでマグリットが描いている鏡の外と、鏡の中の違いのことを指しています。私たちは今こそ、この違いをはっきりと認識に上げなくてはなりません。それによって、ずーっと目の前のここにあったにも関わらず、今まで全く気づくことのできなかつた高次元知覚の扉が同じく目の前のここに新しく開いてくることとなります。それがニューソロジーが予言している、これから人間が移り住んで行くことになる存在論的空間の地平です。

ということで、きょうはここまでにしておきましょう。次回またお会いしましょう。

【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#011(半田)(2022/07/29 uploaded)
「眺望論において、果たして眺望は可能なのか」(30:39)

**Research
Announcements**

#011

眺望論において、果たして眺望は可能なのか？



武蔵野学院大学ニューソロジー研究所

announcer 半田 広宣

(出典:【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#011(半田)
https://www.youtube.com/watch?v=-QMrTQxt_Ag)